

The Byzantine Aristocrats and the Emperors' Government in the Eleventh Century

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000256

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ビザンツ貴族と皇帝政権

——コムネノス朝安定化への過程——

根 津 由 喜 夫

【要約】 十一世紀、ビザンツ帝国は異民族の侵寇と続発する貴族反乱によって内外から激しく揺さぶられ、滅亡の危機に陥っていた。本稿の課題は、この時期の帝国政治の主役を演じたビザンツ貴族たちの行動を分析することで、当時の政治的混沌の原因を探り、そこから、あわせて、こうした深刻な状況を終息させ、その後百年に及ぶ国内平和の時代を築きえたコムネノス朝支配体制の性格を説明することにある。その際には、貴族たちの出身地域ごとの存在形態の違いや、それがこの激動の時代にいかなる変動を被ったかといった点も考察の対象となろう。その結果、この時期の歴代皇帝政権はいずれも少数の支持者で権力の独占を図ったため、疎外された他の貴族の反乱を招き、それが政局のさらなる混沌をもたらし、これに対し、アレクシオス・コムネノス政権の場合は、危機打解のために、当初からの支持基盤である小アジア系貴族に加え、バルカン地域の貴族勢力との妥協・提携を迫られ、それが結果的に多くの貴族層を糾合した安定した支配体制の樹立を導いたこと、が指摘されるのである。

史林 七一巻三号 一九八八年五月

一 は じ め に

千年に及ぶビザンツ帝国の歴史のなかでも、十一世紀ほど激しい変動に見舞われた時代は少ない。この時期、帝国は栄光の頂点からまたたく間に奈落の底へと突き落されたのである。

一〇二五年、バシレイオス二世（在位九七六—一〇二五）が息をひきとったとき、帝国の威光は四囲を圧していた。クレ

タ・キプロス両島の再征服により波静かな内海と化したエーゲ海を囲み、帝国の広大な領土は南イタリアから北シリアに及んだ。ところが一〇八一年、反乱によって帝位を奪ったアレクシオス一世コムネノス（在位一〇八一—一一一八）が目にしたのは無惨に荒廃した帝国の姿だった。小アジアはトルコ人に席捲され、南イタリアのビザンツ領を制圧したノルマン人は今や帝国本土に襲いかかろうとしていた。まさにこの時期、帝国は急速に悪化しつつある状況のなかで、自己の存在そのものを賭けて死にも狂いの戦いを強いられていたのである。^①

当然、これまで多くの研究者の関心は、この急激な衰亡のメカニズムを説明することに注がれてきた。六〇年代に至るまでそうした研究のなかで主導的な役割を演じたのが、いわゆる「ビザンツ封建制論」の視角である。その主唱者G・オストロゴルスキーによれば、ビザンツの国運の急速な失墜は、西欧の封建領主に対応する大土地所有貴族が勢力を拡大した結果、従来、帝国の軍事・財政の基盤を成していた小土地自由農が没落したことの帰結であった。^②彼のきわめて明快かつ整然たる歴史解釈は、学界に多大な反響を巻き起こし、それをめぐって多彩な論争が展開された。^③だが、一時は一世を風靡したこの「ビザンツ封建制」論争も、議論が空虚な概念論に終止したことから、「封建制」の成立期とされた十一・十二世紀に関して史料が決定的に不足していたために、明確な決着を見ぬままにやがて下火になっていった。

これに代わって六〇年代末以降、十一世紀ビザンツ政治史の主役を演じた貴族の正体を、より具体的なかたちで突き止めようとする動きが目立ち始める。それは、「封建制論」がひとつの階級としての貴族の社会・経済的地位の把握を目指すのに急であつたのとは対照的に、むしろ個々の貴族家門やその個々の成員の運命の多様性に注意を向けるものであった。かくして近年の印章学の成果をも活用しつつ、相次いで貴族家門ごとのプロソポグラフィ研究が公刊され、彼らの出自、親子・婚姻関係、官職経歴等が詳細に検討されつつある。^④

このように研究の精緻さが増すのに伴い、十一世紀のビザンツ政治史を、首都を根城とする文官貴族派と、属州の軍事官職を占め、大土地所有者として勢力を揮った軍事貴族派との対立・抗争の図式で捉えようとする通説は、全面的な見直

しを受けることとなった。というのも、プロソポグラフィ研究の進展により、これまで文武いずれかの党派に色分けされていた歴代皇帝政権は、実際にはほぼ常に両方の人間によって構成されており、両者の差異は単に表面的な政策の違い（主として軍隊に対するそれ）に帰されるものであることが明らかになったからである。^⑤

これに対し、井上浩一氏は、政治路線の対立という新しい視点からこの政治的混沌の時代を読み解こうとした。^⑥氏の見解によると、十一世紀の政治不安の原因は、歴代の皇帝が伝統的な皇帝独裁理念に固執して他の有力貴族を政権から排除したのに対し、貴族たちは選挙王政の理念に立ち、自分たちの代表を帝位に就けようと反乱を繰り返したことに存したのであり、後者の立場を受け入れたアレクシオス一世が登位したことで、ようやく政局は安定化に向かったとされる。十一世紀の錯綜した政治情勢を斬新な手法によって分析した氏の所論は、非常に説得的かつ魅力的だが、同時に、政治理念という、ときとして現実と密着せぬ主題を論の主軸に置いたことは、政治的事実を解釈するうえで微妙なズレを生じさせる危険はなかっただろうか。たとえば反乱貴族たちが奉じたとされる選挙王政・貴族連合の理念とは、果たして反乱参加者の集団を越えて、広く貴族階級全体に拡大することを前提とするものだろうか。また、集権化を推進したという歴代の皇帝にしても、王朝のカリスマ性を欠き、事実上有力貴族のひとりにすぎなかった彼らが、単独で他の全ての同輩たちを敵にまわして戦った、と考えるのは常識的に見ても疑問が残る。いずれの問いに答えるにも、その鍵が、この時期のビザンツ貴族をどこまで正確に理解できるか、という点にあるのは疑いえない。彼らの思考形態・行動様式・存立の基盤を明らかにし、彼らが中心的な役割を担った十一世紀政治史の真に意味するところを解明する作業が不可欠となろう。

幸い、今日では井上氏の執筆当時と比べ、飛躍的なほど豊かなプロソポグラフィ的データが活用できるようになり、アメリカの研究者S・A・ケマーに代表される、それらを最大限に活用した政治史叙述も登場しつつある。^⑦ただ、ケマーの場合、一〇五七年のイサキオス・コムネノスの反乱の意義を強調するあまり、後者の反乱成功で事実上筆を止めており、世紀後半の激動の時代については簡単な展望を示すに留まっている点には不満が残る。^⑧また、詳細な政治的事実の解明を

急ぐあまり、これらの研究では概して社会・経済面からの考察が乏しいのも気がかりな点である。

こうした方法論上の不備を補い、さらなる研究の深化をもたらすものとして最近注目されているのが、属州・地域社会の視座から当時の情勢を分析しようとする手法である。^⑧これは、従来のコンスタンティノープル偏重の帝国観を改めるのに有効であるばかりか、これまでひとまとめに「封建貴族」と呼ばれてきた階層についても、その出身地域によって、とりわけ小アジアとバルカンの間では社会・経済的基盤や行動様式の面で微妙な偏差があることを明らかにし、ビザンツ社会の多様性を浮き彫りにする面でも大きく貢献した。^⑨

それゆえ今や、十一世紀の貴族たちの政治行動を、彼らの拠って立つ地域特性・経済状況等に留意しつつ再構成する作業が急務になっている。とりわけこの時期は、帝国諸属州のおかれた状況が異民族の襲撃などで大きな変動を被っていただけに、この視角からの検討はいっそう必須なものとなるだろう。

そこで、本稿の課題は、不明瞭さの残る十一世紀ビザンツ貴族の姿について筆者なりに具体像を与えたうえで、そうした貴族たちが現実の政治の場に関与したかを、上述の彼らの地域的特性などを視野のなかに収めつつ、二つの側面（政権の主要構成員の検出と反乱参加メンバーのそれ）を通じて考察し、最後に政局の混乱を收拾し、以後百年にわたる国内平和を現出させたアレクシオス一世の政権の安定要因を、上記の考察の成果に基づいて探り出すことに置かれることになる。こうした作業を通じてはじめて、我々は、十一世紀のビザンツ政治過程のひとつの帰結として成立したコムネノス朝の性格を正確に把握できるのである。

① 十一世紀ビザンツの最新の通史として、M. Angold, *The Byzantine Empire 1025-1204: A Political History*, London, 1984, pp. 12-113, のさを挙げておく。

② 彼の封建制論の概容については、G. Ostrogorsky, *Pour l'histoire de la féodalité byzantine*, Bruxelles, 1954, Idem, "Die Perioden

der byzantinischen Geschichte", *Historische Zeitschrift*, 163, 1941, S. 229-254, Idem, "Agrarian Conditions in the Byzantine Empire in the Middle Age," in: *The Cambridge Economic History of Europe*, vol. I, London, 1966, pp. 205-234 等参照。

③ 渡辺金「ビザンツ封建制の諸問題——論争の展望——」同氏『

ビザンツ社会経済史研究』岩波書店、一九六八年、三一五〇頁、および米田治泰「ビザンツ封建制」研究の動向、同氏『ビザンツ帝国』角川書店、一九七二年、一一九—一二九頁がこの論争を詳しく紹介している。

④ ビザンツには「封建制」は存在しなかった、という一部の学者の反論に対し、オストロムルスキーは隷属農民の居住する領主所有地の存在こそを「封建制」のメルクマールとすべきであり、その観点からすれば、西欧同様、ビザンツにも「封建制」は存在したと主張する。cf. G. Ostrogorsky, "Observation on the Aristocracy in the Byzantium," *Dumbarton Oaks Papers*, 25, 1971, pp. 1-32, esp. p. 8f.

⑤ 主要なものは、D. Pohlenz, *The Doukai, A Contribution to Byzantine Prosopography*, London, 1968, J.-F. Vannier, *Familles byzantines: les Agyroï (IX^e-XII^e siècles)*, Paris, 1975, W. Seibt, *Die Skleroi, Eine prosopographisch-stiglographische Studie*, Wien, 1976, J.-C. Cheynet et J.-F. Vannier, *Études prosopographiques*, Paris, 1986, などが挙げられる。

⑥ こうした研究の、七〇年代におけるひとつの総合化の試みが、A. P. Kazant, *Современная картина социально-экономического развития Византии XI-XII вв.*, Москва, 1974 である（井上浩一氏の書評『史林』六〇巻四号、一九七七年、一五七—一六五頁参照）。

⑦ 典型的なものとして、S. Vryonis, "Byzantium: The Social Basis of Decline in the Eleventh Century," *Greek, Roman and Byzantine Studies*, 2, 1959, pp. 157-175.

⑧ cf. G. Weir, *Österrömische Beamte im Spiegel der Schriften des Michael Psellos*, München, 1973, S. 77-110. 歴代皇帝政権の主要構成員については、本稿三章で詳しく分析する。

⑨ 井上浩一「コムネノス朝の成立——十一世紀ビザンツ帝国の政治体制——」『史林』五七巻二号、一九七四年、七〇—一〇一頁。

⑩ マケドニア朝の男系断絶後、登位した四人の皇帝（ロマノス二世、ミカエル四世、同五世、コンスタンティノス九世）がいずれも同朝の血をひくソエとの婚姻ないし養子縁組によって初めてその地位を確保したことは、裏返せば、彼らの地位の脆弱性を証明するものに他ならない。世紀後半の皇帝たちには、こうした支えすら失われた。

⑪ S. A. Kaner, *Emperors and Aristocrats in Byzantium, 970-1081*, Harvard University, Ph. D. thesis, 1983.

⑫ 十一世紀後半の政治史については、P. Runcie, *Byzantium during the 'Time of Troubles' (1057-81)*, Harvard University, Ph. D. thesis, 1956, があるが、文武両派の抗争史観に立脚するなど、今日の研究状況から見れば分析が粗いのはなめな。

⑬ 我が国でも既にこうした視角からの研究が登場している。井上浩一「十一世紀ビザンツにおけるイニ・地域社会・皇帝——ケカウメノス『パトラテキコン』再考——」『史林』六九巻四号、一九八六年、七五一—一〇一頁、小田昭善「十一世紀における小アジアのビザンツ貴族」『西洋史学』一四四号、一九八七年、五六—七〇頁。ただし、井上氏の論文は歴史的文献の内容分析に主眼を置いたものであり、十一世紀ビザンツの政治過程の検証は直接の課題ではなかった。他方、小田論文は個別的事象の並記に留まり、残念ながらひとつの属州社会のなかに生きる貴族たちの立体的な像を再構築するに至っていないように思われる。

⑭ M. F. Hendy, *Studies in the Byzantine Monetary Economy, c. 300-1450*, Cambridge, 1985, pp. 69-138, がその代表例である。

ビザンツ人が、一般の人々と区別される一群の社会的特権の所有者を意識するようになるのは、いつの頃からであろうか。おそらくそれが明確な像を結ぶのは、十世紀、「有力者」^{デューナトイ}と総称される人々が出現し、彼らの土地集積が大きな社会問題となったとき以来と見てよいだろう。では、このデューナトイとは何か。彼らによる土地兼併を禁じた九三四年の立法は、「マギストロス、パトリキオス、ストラテীগス、文武の官職あるいは位階の就任者、元老院議員、テマのアルコン、都主教、大主教、主教、修道院長、教会関係のアルコン、国家・教会機関の長」をデューナトイと定義付ける。^①つまり、聖俗の高位の官位・官職保有者がそのメルクマルなのである。ところが当時、国家の官位・官職は原則として一代限りのものだったから、彼らの身分は世襲されることなく、それゆえ、この時期に存在したのは厳密に言えば貴族というより、むしろ特権的官僚層ともいべき存在だった。^②頼るべき門地も血統も持たぬ彼らは、ただ自己の才能と皇帝の恩寵だけを頼みとして巨大な集権的国家機構のなかにくい込み、自身の出世・栄達を図ったのであり、集権体制を整備し、その独裁的権力を強化しようとしていた皇帝にとって、彼らは力強い味方となった。バシレイオス二世の側近に対する年代記の以下の叙述は、このあたりの事情をよく伝えている。

「彼（バシレイオス二世）のまわりには、識見においても優れておらず、生まれも傑出しておらず、弁論の面でもたいして教育もない連中が集められており、彼は彼らに皇帝の勅書を委託し、国家機密に関与させ続けたのである」。^③

長期にわたる対外戦争が十一世紀前半に一段落し、文官主導の中央集権国家へと帝国が変容しつつあったことも、こうした傾向を助長したに違いない。^④

では、彼らはいかなる社会的階層から供給されていたのだろうか。ビザンツでは十世紀頃から姓をもつことが次第に一般化し、それにつれて家門が形成されてゆくのが確認される。^⑤それらのなかには、一族のなかから複数の官僚を生み出し、

いわば「文官貴族」とでも称すべき家柄が見られるのであるが、そうした家門のなかで目につくのは、商工業の職種を姓とするものの数が多いことである。具体的には、十一世紀に有名なコンスタンティノープル総主教を出したケルラリオス家（ロウソク商）の他、アポテイレサ家（チーズ屋）、メタクセサ家（絹商人）などが挙げられよう。^⑦これらは、その家門の始祖の出自を示唆するものと思われる。こうした出身階層のゆえにか、彼ら首都文官層は商業に対して偏見をほとんど持つておらず、それどころかそれに積極的に関与しようとした。十世紀に首都ギルドの活動を規制するために編纂された『総督の書』では、官僚や貴族が商取引に介入し、一般の商工業者の経済生活を圧迫するのを禁じる規定が繰り返し登場し、帝国当局がこうした動きに頭を悩ませていたことを推察させる。^⑧

かくして、一〇三四年に、小アジアの商人・金融業者出身のパフラゴニア家が帝位に就いたことは、その基盤を大きく重なりあわせた中央官僚と都市商工業者層の政治的提携を象徴する、極めて注目すべき出来事であった。^⑨

ところが、こうした趨勢に異を唱える人物も存在したことを、史家ヨハネス・スキュリツェスが報じている。それは、小アジア出身の有力な軍人コンスタンティノス・ダラッセノスだった。

「他の全ての人は、それに返答し、好意的な歓呼によって、この若い皇帝（パフラゴニア家のミカエル四世）を賞揚した。しかるに、パトリキオスのコンスタンティノス・ダラッセノスは、自宅に籠もって、この知らせを穏やかに受け入れることができず、そこで言われていることに不快感を示し、どうして名高い家柄の、傑出した家系の出の非常に高潔な人々があまたいるなかで、三文の値打ちもない平凡な人物が他の全ての人々に先んじて、専制者かつ皇帝と宣言されたのか、と驚いていた」。^⑩

このダラッセノスの言動から、従来の価値観と明らかに異なった意見をもった人々が生まれつつあったことが窺われよう。彼らは、言うなれば「軍事貴族」と総称されるような人々であり、その存在形態は、高貴な家門への誇り、軍人としての自負、そして土地経営への愛着によって特徴付けられていた。

なお、さきのダラッセノスの発言に関連して、家柄に関して付言しておく、実際には同家とパフラゴニア家との間に

は、門地の古さに関してはさしたる差はなかったことが指摘されている。^⑪問題は、しかし、そうした事実ではなく、彼らの意識の内面であった。十一世紀の軍事貴族はしきりに自己の家系を十世紀の有力貴族に、そしてさらには古代ローマの伝統にまで遡らせようと努めている。たとえば、ミカエル・プセルロスはドゥーカス家の門地の高さを讃えて、次のように語る。

「曾祖父にまで遡る彼（コンスタンティノス十世ドゥーカス）の一族は優美で富裕であり、そうしたことは歴史書のなかに満ちている。実際のところ、今やあらゆる人々の口にはのぼっている、かのアンドロニコスやコンスタンティノス、そしてパンテリオスは男系・女系を通じて彼の血縁に連なる人々であった。」^⑫

また、ニケフォロス・ブリュエンニオスによれば、ドゥーカス家の祖はコンスタンティヌス大帝のいとこで、彼と共にローマからコンスタンティノープルに移り、都のドックス（長官）に任じられた人物だとされる。^⑬

一方、ボタネイアテス家は、ミカエル・アッタレイアテスの語るところによれば、十世紀のフォーカス家と縁戚関係にあり、さらに九十二代遡ると共和政ローマ時代のファビウス氏族に到達するとされ、スキピオ・アフリカヌスやアエミリウス・パウルスといったローマの英雄たちの血を彼らは受け継いだことになっている。^⑭

名門出身であることを誇示しようとする彼らの思いは、姓の名乗り方にもはっきりと認められる。ビザンツ貴族の場合、子供は常に父姓を名乗るとはかぎらず、男系・女系を問わず門地の高い方を選ぶ傾向が見られた。たとえば、アレクシオス一世の母アンナ・ダラッセナの父はカロン家の出身であり、その姓は母方から受けとったものであった。^⑮また、同帝の長女アンナ・コムネナとニケフォロス・ブリュエンニオスの間に生まれた二人の男子のうち、長子は母の姓を継承してアレクシオス・コムネノス、さらに次子に至っては父母いずれの姓でもないヨハネス・ドゥーカスと名乗っている。実を言えば、後者はその姓を母方の祖母、つまりアンナの母親エイレネ・ドゥカイナから受け継いでいたのである。^⑯

文官貴族たちが首都の中央行政機構を自己の才覚を試す場としたのに対し、軍事貴族たちがその実力を発揮したのは、

常に異民族との緊張関係の下におかれた辺境地帯においてであった。十世紀に編纂された軍書には、彼ら軍人の強い自負心がにじみ出ている。

「そうしたこと（＝精力的に武芸に励むことにより、勇敢で最大限の力を発揮しうること）は、ローマ人の支配地の境界地帯に入植し、敵と境を接している人々から明らかである。というのも、際限なく間断ない戦争状態が彼らを強健で勇敢にさせているのだから。彼らの鍛錬や軍事遠征（「への従事」）を斟酌して、いにしえに定められたローマ人の法に従って、彼らの「家」^{オイクス}はあらゆる侮辱から免れるように配慮されるべきであり、また、彼らはキリスト教徒の守護者として讃えられるのが似つかわしい。そして、徴税人や何かによって彼らは辱しめを受けたり、ましてや侮辱されるべきではない。というのも、名誉と自由が彼らに勇気を奮い立たせ、あらゆる死を軽蔑し、我がが聖なる皇帝と彼ら自身の祖国のために進んで危険に身を曝させるからである。」^⑰

ここに見られるのは、中央の官僚機構から相対的な自立を保つ、雄々しく誇り高い軍事貴族の姿である。

そして、所領経営が彼らの自立心を物質的に保障していた。それらの所領・財産は、彼らに言わせれば、自己の実力によって獲得されたものに他ならなかった。十一世紀末、グルジア出身の有力貴族グレゴリオス・パクリアノスは誇らかに次のごとく断言する。

「不動産も、動産も、官位も、そうした（私の所有する）全てのものは、神の御加護と私の両親の聖なる祈りによって、そして私の多くの奔走と私の被ってきた難儀によって、労苦と私の流してきた血によって獲得したものであり、何か他の助けや仲介によるものではないのである。」^⑱

これらの所領で彼らは私兵を養っていた。その私的武力によって、彼らは領内の農民を威圧すると共に、後者を外敵から守ったのであり、隣接する領主との境界紛争においても、その力はいかなく発揮された。^⑲

それでは、一見したところ、対立・競合関係にあるように思われる文官貴族の価値観と軍事貴族のそれは、同時代人の目にはどのように映っていたのだろうか。ここでは、一般に文官派の領袖格と目されるミカエル・プセルロスの言動を通

じてそれを考察してみたい。

彼が、コンスタンティノス・ドゥーカスの家柄のよさを賞揚しているのは既述したとおりである。その一方で、彼はコンスタンティノス・カパシラスという人物について、「ヘレネスの生まれではなかったが、その精神は最も素晴らしい氏族のものであり、英雄のごとく見えた」と記している。ここには、疑いもなく、家柄以上に個人的資質を重視する旧来の尺度が顔をのぞかせているのがわかる。こうした一見、矛盾するような言動は、彼の妻の実家に対してなされたコメントからも確認できる。ある書簡のなかで、彼は屈州出の娘と結婚し、彼女に装身具や宝石のかわりに牛や羊の群を贈ることを語っている。② プセルロス自身の家は、彼自身の言葉によれば、かつて高位の官人を出したこともある家柄とされ、そうした視点で見れば、彼の口調のなかに、都市門閥の立場から田舎者の妻の実家を冷笑する響きを感じとれるかもしれない。しかし、そうとばかりも言えなかった。別の書簡で、彼は自分の娘ステイリアナが「母方から多くの高貴さを受けとって」おり、「皇帝たちの血の滴が彼女をかたちづくっていた」と自慢しているのである。このように、プセルロスは、従来の個人の資質重視の尺度を抱きつつ、家柄や血統への愛着にも強く影響されており、彼にとって二つの徳目は対立するものではなく、同時に混在・共存が可能なものであった。そして、このように新旧の価値観が一人の人間のなかで複雑に交錯していることも、多様な文化的・思想的因子が飛び交い、混沌とした様相を呈したこの時代の過渡的性格の一面を示すものとして理解できるのではなからうか。③

ここまでの考察から、十一世紀のビザンツ貴族は、文官貴族と軍事貴族の二類型に大別され、両者のもつ価値観は、同時代人の心情のなかに微妙に入りまじっていることが判明した。だが、時を経るに従って、両者のうちで次第に優位を占めていったのは軍事貴族の価値観であった。そのことを我々が感じとるのは、東西属州貴族に対する同時代人の評価を通じてである。

M・F・ヘンディーの研究によれば、都市との関係において、小アジアとバルカン属州の貴族は対照的な地位にあった。

つまり、バルカン貴族は都市集中地域に自己の生活圏を大きく重ねあわせていたのに対し、小アジア貴族の主たる勢力範囲は都市の分布密度の低い半島中部だったのである。④ こうした両者の違いは、同時代人にも認識されていたらしい。それを要約するなら、バルカン貴族は都会的で智謀に長けており(悪く言えば狡猾)、小アジア貴族は農村的・質朴で武勇に優れている、といったところであろうが、興味深いのは、同時代人が両地方の貴族を比較する場合、ほぼ常に前述の軍事貴族の尺度を持ち出して、小アジア側の優越を強調している点である。たとえばミカエル・アタタレイアテスは、小アジア出身のニケフォロス三世ポタネイアテス帝(在位一〇七八―一〇八二)とバルカン出身の反乱者ニケフォロス・ブリュンニオスをはっきり対比させて、こう述べている。

「『というのも皇帝(『ポタネイアテス』)は東方の高貴な生まれであり、一方、彼(『ブリュンニオス』)は西方出の卑賤な出自のものであった。』」⑤

こうした観点で見れば、都市生活に馴染んだバルカンの貴族は墮落した放縦な存在として人々の目に映ったのも不思議ではない。プセルロスは、十一世紀半ばに反乱を起こしたレオン・トルニキオスを評して「マケドニア的な傲慢さをまぎ散らしていた」⑥と語り、その配下のマケドニア出身の軍人たちを「放恣・無分別を喜ぶ連中で、軍隊の質朴さよりも都市の戲けたことの方に慣れ親しんでいた」⑦と非難している。このように、武勇を重んじ、都会の華やかな生活よりも農村での純朴な暮らしを尊ぶ小アジア軍事貴族の価値観が帝国全域に浸透したことの背景には、十一世紀前半での東方戦線における偉大な勝利の記憶と、十一世紀後半の軍事危機の激化に伴う国家の再軍事化の進行という現象を考慮に入れるべきだろう。その際、東方辺境を舞台とし、小アジア貴族の理想像とも言うべき主人公が活躍する英雄叙事詩(特に『ディゲニス・アクリタス』は、帝国全域の一般人に(たぶん)美化されたかたちでの)東方貴族の尚武の気風に憧憬の念を起こさせるうえで、大きな役割を果たしたに違いない。⑧

ところが、こうした貴族間の東高西低現象は、十一世紀のあいだに大きな変動を被ることになった。まず第一に、「プ

ブルガリア人殺し」と異名をとったバシレイオス二世によって、第一次ブルガリア王国が最終的にビザンツに併合されたことにより、バルカン貴族の勢力拡大のための広大な後背地が出現したこと。^③そして第二に、世紀後半、とりわけ七十年代以降、トルコ人の小アジア侵攻が本格化し、この地域の貴族の所領経営が危機的状況に陥ったことである。こうしたなかで、バルカンに土地を獲得し、本拠を西方に移そうとする小アジア貴族の姿も見られるようになる。^④これらの事件が、東西貴族間の力関係に微妙な影響を及ぼすことになったのは想像に難くない。

従来の研究では、こうした、地域に着目した視座はほとんど留意されてこなかったが、しかし、一〇八一年当時、帝国の小アジア支配がほとんど麻痺状態にあったときに、小アジア系貴族を支柱とするコムネノス朝政権が発足し、安定した支配体制を樹立することのできたメカニズムを解明するうえで、こうした東西貴族間の力関係の推移や小アジア貴族の西方移住の問題は、決して避けて通ることのできぬ、重要な分析課題となるはずである。それゆえ本章で十一世紀の政治過程を検討してゆく際に、この視角からの検証は欠かせぬものとなるだろう。

- ① Z. Zepos & P. Zepos, *Jus Graeco-Romanum*, Athen, 1931, vol. I, p. 209. 井上浩一『ユキニシ帝国』岩波書店「一九八二年」一六七―八頁。
- ② M. フンブールによれば、高貴な出自よりも高位の国家官職にあることが「貴族」の本分とするこうした階層は、語の厳密な意味における aristocracy であるが、むしろ meritocracy に近く存在していた。cf. M. Angold (ed.) *The Byzantine Aristocracy, IX-XIII Century*, Oxford, 1984, p. 1.
- ③ Michael Psellus, *Chronographia*, ed. E. Renauld, 2tome, Paris, 1926-1928, I, p. 19.
- ④ cf. 米田治泰「十一世紀ビザンツの文治主義——コンスタンティヌス九世を中心に——」同氏『ビザンツ帝国』一五五―一九〇頁。
- ⑤ cf. E. Patlagean, "Les débuts d'une aristocratie byzantine et le témoignage de l'historiographie: système des noms et liens de parenté aux IX^e-X^e siècles", in: M. Angold, (ed.), *The Byzantine Aristocracy*, pp. 23-42.
- ⑥ cf. Kankari, *Cognatunā coonaa*, crp. 132-139.
- ⑦ カンタンの調査結果によれば、軍事貴族のなかには、ハニエロヒス(托着郎)など、このカトリックに属するものがあるが、その比重は文獻によっても異なる。Tam xe, crp. 194.
- ⑧ *The Book of the Eparch*, London, 1970, pp. 30, 32-33, 37. 井上『ユキニシ帝国』一〇四―一〇五頁。
- ⑨ cf. Hendy, *Monetary Economy*, pp. 570-582.
- ⑩ Ioannes Scylitzes, *Synopsis historiarum*, ed. I. Thurn, Berlin,

1973, p. 392f.

- ⑪ cf. Kerner, *Emperors and Aristocrats*, pp. 191-193. コンスタンティヌス・マクシマヌスの家門が、彼の父マクシムスによつて開かれた新興の家族であった。
 - ⑫ Michael Psellus, II, p. 140. フンブールはコンスタンティヌスの父子が十一世紀の非連の名望、コンタリオスも帝国中央軍スモラニ軍団司令官の叙任時のキチルに比せざる人物である。cf. Polemis, *The Doukas*, pp. 14-25.
 - ⑬ Nicephorus Bryennius, *Historiarum libri quattuor*, ed. G. Gauthier, Bruxelles, 1975, pp. 67-69.
 - ⑭ Michael Attaleiates, *Historia*, ed. I. Bekker, Bonn, 1853, pp. 217-220.
- 無論、こうした主張の信憑性は当時から疑われていたらしく、家門の高貴さをめぐって同時代史家の評価は一定ではなかった。たとえば、フンブールはマクシマヌスの一族を評して「マカセル七世帝以来の卑賤の身から高位に就けられたことを強調している」と、また、マカセル家の門地をめぐってフンブールはほぼ同じ内容を示している。コンタスの記述は「十世紀のマカセル家の男系が絶えていくことを指摘し、コンスタンティヌス十世の家系がその純粋な後裔でなく、この主張の力点で置かれるべきである」。cf. Michael Psellus, II, p. 183. Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum*, III, ed. T. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p. 675f.
- ⑮ 彼女の「ヘロニーメ」B. Skoulatos, *Les personnages byzantins de l'Alexande, Analyse prosopographique et synthèse*, Louvain, 1980, pp. 20-24.
 - ⑯ Polemis, *The Doukas*, p. 113. cf. A. P. Kazhdan & A. W. Epstein, *Change in Byzantine Culture in the Eleventh and Twelfth Century*, Los-Angeles, 1985, pp. 102-104.
 - ⑰ G. T. Dennis, ed., *Three Byzantine Military Treatise*, Washington, D. C., 1985, pp. 318-320.
 - ⑱ P. Gautier, "Le typicon du sébasto Grégoire Pakourianos," *Revue des Etudes byzantines*, 42, 1984, p. 93.
 - ⑲ 風州貴族の代表と見做される Ostrogorsky, "Observation on the Aristocracy," pp. 12-15. 以下挙げる事例を参照した。
 - ⑳ Michael Psellus, I, p. 108.
 - ㉑ K. N. Sathas, *Meatrewetj gylatdyky*, 7vols, Venice & Paris, 1872-1894, vol. 5, p. 456f.
 - ㉒ 「カセル＝マカセルの出自・経歴は、井上浩一「十一世紀コンスタンティノープルの『法科大学』」中村賢二「郎編『都市の社会史』」ネルヴァ書房、一九八三年「二二―二三頁」詳しく検討されている。
 - ㉓ Sathas, *Meatrewetj gylatdyky*, vol. 5, p. 63.
 - ㉔ P. Lemerle, "Byzance au tournant de son destin (1025-1118)," in: Lemerle, *Cinq études sur le XI^e siècle byzantin*, Paris, 1977, pp. 249-312. は十一世紀ビザンツを社会・文化的転換期として鮮やかに描き出している。
 - ㉕ Hendy, *Monetary Economy*, pp. 78-108, 131-138. このような小アジア・バルカンの都市に対する貴族の親密度の違いは、当然、都市生活やそれに付随する商業活動に対する彼らの態度に相違をもたらしたと予想される。この点で、バルカン貴族の方が商業や貨幣経済に対して柔軟で、首都の文官貴族により近う存在形態を示したと考えられるが自然であろう。
 - ㉖ Michael Attaleiates, p. 288.
 - ㉗ Michael Psellus, II, p. 14.

②③ *ibid.*, II, p. 22. これに加えて、首都近郊に居住するマケドニア人の性を伝える II, p. 16. の記述も参照せよ。

②④ ユザンツ社会に英雄叙事詩が果たした役割については、Kazhdan, *Change in Byzantine Culture*, pp. 117-119, S. Stavakas, *The Byzantine Provincial Elite: A Study in Social Relationship during the Ninth and Tenth Centuries*, The University of Chicago, Ph. D. thesis, 1978, pp. 12-14.

②⑤ W. E. Kaegi, "Regionalism in the Balkan Armies of the Byzantine Empire," *Actes du II^e Congrès International des Études du Sud-Est Européen (Athènes, 1970)*, t. II, Athens, 1972, pp. 397-405, esp. 402-403. は小アジアの大貴族バルダヌス・フォーカスがハン

レイオス二世に反乱を企てた理由のひとつには、同帝のブルガリア征服により小アジア勢力の力の優位が揺らぐのを恐れたことがあったと語る。ビザンツ軍の対ブルガリア戦前進基地として機能したアドリアノールが、十一世紀にはバルカン貴族の一大拠点となっている(本稿第三章を参照)のは、この点で暗示的である。

②⑥ たてしやシモン・ティオス・ペトル・アノスの事例(P. Tivev et G. Cankova-Petkova, "Au sujet des relations féodales dans les territoires bulgares sous la domination byzantine à la fin du XI^e et pendant la première moitié du XII^e siècle," *Byzantinobulgaria* 2, 1966, pp. 107-125)を参照せよ。こうした動きは本稿第三章で検討する。

三 皇帝政権と貴族反乱

十一世紀のビザンツ政治史は、めまぐるしい皇帝の廃立と続発する貴族反乱に彩られ、終始混迷が続いた。では、いったい何故ゆえに歴代皇帝政権は短命に終わらざるをえなかったのか。また、貴族たちを繰り返し反乱に駆り立てたのは何だったのか。これらの問いに答えを見出すためには、皇帝権とそれをめぐる貴族たちの動向をできる限り綿密に分析し、彼らの人間関係を洗い出すことが緊要である。具体的に言うなら、ある特定の皇帝政権において、いかなる人々がその中枢に座り、政権の強化と安定を図ったのか、また、それに対していかなる人々が反乱の兵を挙げたのか、その対立の理由は何か、そしてさらに、各々の党派集団の成員相互を結ぶ絆は何か、といった点が検証されねばならない。その際、ある貴族反乱を取り上げる場合でも、単に反乱者陣営にばかり気をとられるのではなく、その鎮定を命じられた皇帝軍の指揮官たちの顔ぶれにも注意を払うべきであろう。後者は、皇帝の信任厚く、かかる危機的状況のもとで現政権への支持を貫くことが自明のものとして期待されている人々、とみなしうるからである。かくして、政治的に敵対する二つの陣営の内

部構成を吟味することにより、貴族層内部の複雑な利害の対立や、あるいは家門間の同盟関係が解明され、それらがもつ党派性の特徴も浮かびあがらせることが可能となろう。^①

我々は考察の対象として以下の二つの期間を設定してみたい。すなわち、コンスタンティノス九世の登位からイサキオス一世の登位までの十五年間(一〇四二—一〇五七)とミカエル七世の登位からアレクシオス一世の登位までの十年間(一〇七二—一〇八二)がそれである。この二つの期間を定めたのは、以下の点からであった。第一に、十一世紀における属州貴族の反乱は事実上、この期間に全て集中しており、貴族反乱の全体像を把握するには、この期間の考察だけで充分である。^②第二の理由は、この二つの期間の間に帝国を取りまく状況は著しく変動しており、そうした要因が、反乱の形態や皇帝政治のあり方にいかなる影響を及ぼしているのか、比較・対照することで、興味深い知見が得られると思われるからである。いわば、この二つの期間を分析することで、我々は、激動する情勢のなかで苦闘したビザンツ貴族たちの行動の軌跡をたどることになるのである。

1 一〇四二—一〇五七年

マケドニア朝の皇統を受け継ぐゾエの三人めの夫として帝位に就いたコンスタンティノス九世モノマコス(在位一〇四二—一〇五五)には、一般に文官派皇帝の代表者、集権政治の推進者という強いイメージが付きまといっている。そうした評価は、おそらく同帝によるプセルロスら学者文化人グループの登用や帝国大学の再興、なかんずくイベリア属州の駐屯軍解散といった政策に由来するものであろう。^③かような同帝への印象は、その即位後まもなく、將軍ゲオルギオス・マニアケスが任地のイタリアで反乱を起こしたとき、軍務に通じていない宦官に追討軍の指揮権を委ねていることで、いっそう強められるかもしれない。^④

だが、この反乱事件の性質を、それほど単純に割り切ることはできそうにない。というのも、この事件の背後には、小

アジアの有力軍事貴族同志の確執があったからである。テマリアナトリコンにあったマニアケスの本拠は、もう一人の有力貴族ロマノス・スクレロスの所領と境を接していたが、両者の間には以前からいさかいが絶えず、一時はマニアケスの攻撃で危うくスクレロスは生命を失いかけたことすらあったらしい。^⑥ところが、コンスタンティノス九世の登位が状況を一変させた。皇帝がロマノスの姉を側妾として宮廷に迎え入れた結果、ロマノスもマギストロスの位階とプロストラートルの官職を授けられ、モノマコス政権を軍事面で支える役目を負うことになる。^⑦かくして強大な権力を手にしたロマノスは、積年の恨みを晴らすべく、「マニアケスの不在を衝き、彼に属する土地を荒らし、掠奪した」のであり、その知らせを前線で受けたマニアケスは、この屈辱に耐えられず、兵を返して都へ進軍することを決断したのだ。^⑧

ゲオルギオス・マニアケスの反乱は、皇帝軍との戦いのさなかに彼が不慮の死を遂げたため、唐突に幕を閉じた。^⑨しかし、コンスタンティノス九世政権にとって試練はまだ続く。一〇四七年、同帝の母方のいとこ、レオン・トルニキオスが本拠のマケドニア地方で反乱の兵を挙げたのである。その原因は必ずしも明瞭ではないが、近年の研究によれば、中央政府の冷遇を不満とするマケドニアの將軍・貴族たちが、陰謀の嫌疑をかけられ修道院入りを強いられたトルニキオスを首領として擁立した、といったところが真相に近いらしい。^⑩支持者の手引きで都を脱したトルニキオスは故郷のアドリアノブルの町に到着すると、ただちに軍の召集に着手した。

「……彼は密かに、少しずつ、以前からアドリアノブルにいて、軽視され、怠惰にしていた將軍たちを手下にした。そして彼らや自己の親族たちを通じて、マケドニアやトラキアのタグマタを指揮していた人々や、暇をもて余していた兵士たち、そして戦利品獲得や掠奪好きの連中を籠絡して、充分な兵力を組織すると、彼は皇帝に宣言された。」^⑪

この記述から、彼の軍の中核を形成していたのは、彼と地縁・血縁で結ばれた西方属州の將軍・貴族たちだったことが窺われる。そのなかには、ヨハネス・ヴァタツェス、マリァノス・ブラナス、ロマノス・ストラボミテス、ポリュスといった面々の顔が見られた。^⑫後の三人は「西方のタグマタのアルコンで、彼（トルニキオス）と血縁関係にあった」と言

われ、また、ヨハネス・ヴァタツェスも「彼の親族の將軍」である。^⑬このように、彼の反乱は明瞭にバルカン貴族のそれとしての様相を呈していたと言える。陣容を整えた反乱軍は、途中いかなる妨害も受けることなく首都の城下に到達し、都の攻囲に入った。^⑭

だが、とかくするうちに皇帝への忠誠を守る小アジアの軍勢が首都救援のために接近しつつあるという知らせが届き、トルニキオス軍は首都攻囲を中断してアルカディウポリスに撤退、一部の軍は、トラキア・マケドニア地方で唯一、反乱軍への加担を拒んだライデストスの町の攻略に向かった。この都市は、町の主教と在地の豪族でトルニキオスの親族（！）のヴァタツェスの指導によって頑強に抵抗を続けていたのである。^⑮

東方の軍勢の到着で反乱は最終局面に入る。反乱軍は戦わずして四散してしまい、ブラナス、ストラボミテスらトルニキオスの親族までもが皇帝側に寝返った。^⑯結局、取り残されたトルニキオスは、最後まで彼に従ったヨハネス・ヴァタツェスと共に捕えられ、その野望の代償として両眼の光を奪われたのである。^⑰

それからおよそ十年、久しく帝権に対して従順な態度を保っていた東方属州の貴族たちが叛いた。この子細は以下のとおりである。

コンスタンティノス九世が一〇五五年に没した後、国政を担当したテオドラ、ミカエル六世二代の政権は、露骨な文官優遇策を採り、この間、多くの有力な軍事貴族が職を逐われた。^⑱一〇五七年の復活祭に、イサキオス・コムネノス、カカロニ・ケカウメノス、ミカエル・ブルツェス、コンスタンティノスとヨハネスのドゥーカス兄弟ら、小アジアの主だった將軍たちが上京して、皇帝に待遇改善を求めたときも、後者の態度は冷淡だった。^⑲ここに至って貴族たちは協議の末、イサキオス・コムネノスを対立皇帝として擁立し、反乱行動に出ることを決する。パフラゴニア地方カスタモンのイサキオスの所領には、ロマノス・スクレロス、ミカエル・ブルツェス、ニケフォロス・ボタネイアテス、バシレイオス・アルギュロスの息子たちが兵を率いて集結し、イサキオスを皇帝に宣言した後、東部国境地帯の兵を引き連れたケカウメノ

イサキオス＝コムネノスの反乱参加者の官位・官職の推移（括弧内は史料・典拠）

	氏 名	反乱時の官位・官職	反乱後の官位・官職
1	ヨハネス＝コムネノス （イサキオスの弟）	ドゥクス (Psl. II, p. 95)	クロバラテス 西方軍総司令官 (Bry. p. 79)
2	カタカロン＝ケカウメノス	マギストロス (Sky. p. 483)	クロバラテス (Sky. p. 500)
3	ロマノス＝スクレロス	プロエドロス (Sky. p. 488)	プロエドロス (註1) 東方のストラトペダルケス
4	ミカエル＝ブルツェス	ヴェスタルコス (Sky. p. 483)	マギストロス (註2) テマ・アナトリコンのストラ テゴス
5	コンスタンティノス＝ドゥ ーカス	ヴェスタルコス (Att. p. 56)	プロエドロス (Att. p. 69)
6	ニケフォロス＝ボタネイア テス	マギストロス (Att. p. 56)	マギストロス (註3) エデッサのドゥクス(?)

註 1) Seibt, *Die Skleroi*, S. 82.2) Cheynet et Vannier, *Études prosopographiques*, p. 33.3) G. Zakos & A. Vegliery, *Byzantine Lead Seals*, t. I, Bale, 1972, pp. 1462-1464.

(* 以上は、印章資料に拠るものである)

スと合流して、一路、帝都への進撃を開始した。

一方、皇帝ミカエル六世も、この間、手をこまねいていたわけではない。同帝は、当時東方軍総司令官の地位にあった宦官テオドロスをストラテゴス・アウトクラトルに任じると共に、アローン・ウラディスラフ（イサキオスの義兄弟）を共同指揮官として彼に同行させ、反乱軍の追討を命じた。彼らの旗の下には、バシレイオス・タルカネイオテスの指揮するバルカン属州軍、イサキオスの軍から指揮官ともども離脱したテマ・アナトリコンとカルシアノンの軍、そしてフランク人ランドゥルフの率いる外人傭兵部隊が結集していた。プセルロスは、両軍を比較して、次のように評している。

「皇帝軍は数の点で優っていたのは明らかだが、実力と陣立ての面では彼方の部隊が優れており、さらに重要かつ素晴らしいことに、彼方の軍には一枚岩の団結とその指揮官に対する確固たる信頼感があったのに対し、我が軍は、当てにならず、ばらばらであり、毎日毎日、多くの人々が帝位僭称者の部隊へ走っていた。」

果たして、ニケーア近郊で行なわれた両軍の決戦において勝利の栄冠を手にしたのは、実力と結束力に勝る反乱軍の方であった。③。ほどなくして、首都の人心収攬に失敗したミカエル六世の政権は自滅し、帝権はイサキオスの手に帰すことになる。④。

井上氏の所説によれば、ミカエル六世側の使節との交渉の過程で、僚友の反対を退けて皇帝独裁権の理念を受け入れたイサキオスが登位後もその路線を推進したことが、軍人を含む広範な人々の離反を招いたと指摘されている。⑤。だが他方において、彼が反乱成功後に、自己の盟友たちに爵位・官職を授けて、その労に報いている事実も看過すべきではない（付表参照）。彼らの支持と協力なしにはイサキオスの政権は存立しえなかった、というのをもたまたま事実なのである。

ここで、複数の有力貴族が連携し、彼らの本拠地で挙兵した、という点で共通の性質を帯びたレオン・トルニキオスの

反乱とイサキオス・コムネノスのそれを比較・対照させて、この時期の貴族反乱の特質を整理しておきたい。

まず、いずれの場合にも貴族たちが反乱に乗り出す直接の契機は、彼らが中央政府から冷遇され、権力から疎外されたことに求められる点指摘できる。その際に、反乱に参加する主要メンバーに地縁的まとまりが見られること（換言すれば、地域の枠を越えた貴族の階級的結集は認められぬこと）に留意せねばならない。⑥。反乱参加者が概して地域的グループに限定された理由は、彼ら個々人がそれへの参加を決断した動機を吟味することで、探ることができる。ここで参考になるのが、ロマノス・スクレロスの事例である。⑦。

彼が、コンスタンティノス九世帝の下で要職に就けられた結果、その勢威を盾に、ゲオルギオス・マニアケスとの所領紛争で優位に立ったことは既に述べた。だが、同帝の死と共に彼は官職を解かれ、所領に退くことを余儀なくされる。そんな彼にとって、イサキオス・コムネノスの反乱は、中央への復帰を果たすまさに千載一遇の好機であった。彼は反乱軍の先頭に立って奮戦し、この結果、新皇帝イサキオス一世とそれに続くコンスタンティノス十世の治世に、東方のストラトペダルケス、⑧。西方軍総司令官、⑨。を歴任し、軍人として最高の榮譽に浴したのである。

ここからわかるように、属州貴族が反乱に加わるのは、第一義的には自

身の榮達のため、中央權力の巨大な「再分配」機構に連なるためであり、そのことが、ひいては自己の所領経営の成功やライバルとの闘争の勝利を導いたのである。そうした観点で見れば、彼らが貴族「階級」全体の利害の実現に関心を示さなかったことはむしろ当然であり、それどころか彼らの反乱の成功が他の有力貴族の利害の排除をもたらしたことも容易に想像できるだろう。^⑨ 反乱貴族が極めてエゴイスティックな動機に基づいてそれに加わっていたことは、ひとたび形勢が不利になったとき、たちまち反乱軍が自壊現象を呈する点に如実に表れている。トルニキオスの乱に際して、彼の親族でありながらライデストスのヴァツェスはこれに与せず、また乱の終盤でブラナスら彼の親族たちがトルニキオスを簡単に見捨てていることは、冷徹なまでの彼らの利害計算をかいま見させるものである。それゆえ、こうした個々の思惑や打算を胸に秘めた貴族たちを糾合して反乱が成し遂げられた場合、彼らが選んだ「対立皇帝」が正式な即位後、独断的に振舞ったならば、反乱参加貴族の反感を買うのは理の当然であった。その意味で、井上氏の主張することく、反乱貴族たちは皇帝が「仲間内の第一人者 *primus inter pares*」であることを願ったのは首肯しうるが、その「仲間」とは、ここに至る経緯から見て、反乱参加貴族に限定されるのも疑いえず事実と言えよう。

次に、実際の反乱の成否を決したものは何かと言えば、それは反乱軍と皇帝軍の軍事的衝突の結果次第と言わねばなるまい。この点で、ここに取りあげた二つの反乱の成否を分けたのは、首都の元老院と民衆の帰趨であったという研究者もいるが、両者の間では首都の政治勢力の置かれた状況は全く異なっていたことを見落すべきではない。つまり、トルニキオスの乱の場合、反乱軍が都を囲んだとき、東方から皇帝軍はまだ到着しておらず、首都の人々にとって旗幟を鮮明にするには両軍の会戦の結果を見届けてからでも遅くなかったのに対し、皇帝軍が早々に反乱軍に撃破されてしまったイサキオス・コムネノスの乱の際には、彼らの選択の余地はおのずと狭められたからである。

そして、攻守ところを変えて対決した二度の合戦において勝利を収めたのは、常に東方・小アジアの軍勢であり、彼らの令名に偽りのないことを証明した。都に入ったイサキオス・コムネノスは、自己の政權獲得が實力に基づくことを誇示

するごとく、剣を持った自身の姿を金貨に刻んだ。^⑩

だが、他の多くの政權と同様、彼自身のそれも短命に終わる運命にあった。その原因は、ここまでの考察から、単に彼の武断政治や独裁制への傾斜に求めるよりも、支持基盤を反乱に結集した東方貴族以外に拡大しえぬ、この政權の本質的な限界に帰すべきと筆者は考えたい。

2 1041—1081年

イサキオス・コムネノスが都入りを果たしてから十四年、帝国をめぐる状況は大きく変容していた。彼の反乱に加わるべく、カタカロン・ケカウメノスが東部国境の軍を率いて都への道を急いだ後を、トルコ人たちは安々と帝国領内に侵入した。たび重なるトルコ軍の侵寇に終止符を打つため、国力を結集して敢行されたロマノス四世ディオゲネス帝（在位1068—1071）の大規模な遠征も、1071年、マンツィケルトで惨敗を喫し、同年、ビザンツ領南イタリア最後の拠点バリもノルマン人の手に陥ちた。^⑪

こうした困難な局面で登位した若年のミカエル七世ドゥーカス（在位1071—1078）を支えたのは、やはり彼の親族や同家ゆかりの人々だった。彼の登位を工作したカイサル・ヨハネス・ドゥーカスは彼の叔父だったし、カイサルの息子アンドロニコスとコンスタンティノスは、トルコ人に釈放されたロマノス四世の軍との内戦において皇帝軍の指揮官として活躍している。^⑫ この時期の内政を委ねられた宦官ニケフォリツェスとの主導権争いに敗れ、カイサル一族が後景に退いた後には、いずれもドゥーカス家と婚姻関係の絆で結ばれたイサキオスとアレクシオスのコムネノス兄弟が彼らに代わって軍事面で中心的な役割を担った。^⑬ さらに同帝の親族コンスタンティノス・カッパドクスは中央軍「アタナトイ」隊長、皇弟コンスタンティオス・ドゥーカスも同帝の治世末年には有力な軍人に成長している。^⑭

しかし、その一方、ニケフォリツェスによって推進された厳しい緊縮政策や強引な集権化の企て、なかんずくライデス

トスの町に導入された穀物専売事業とそれに伴う物価の騰貴は人々の不満を募らせ、こうした民心の離反を背景に、東西の属州で相次いで有力貴族が反乱に立ち上がった。

一〇七七年、デュラキオンのドゥクス、ニケフォロス・ブリュエンニオスが挙兵したのに呼応して、ライデストスの町では当地の有力者でブリュエンニオスと縁戚関係にあったヴァタツェス家の女当主が、多くの人々を糾合して決起し、現政權の王政の象徴というべき、穀物取引所を襲って、それを大地に打ち倒した。^⑧

同じ頃、ブリュエンニオスの本拠、アドリアノーブルの町でも、彼の兄弟ヨハネスが受け入れ準備を着々と進めており、「町の主だった人々全員に、この問題で彼の一味に加わるよう説得し、アドリアノーブル全市を彼の陣営に引き入れ」ることに成功していた。^⑨ 唯一、これに抵抗した同市長官カタカロン・タルカネイオテスも、最終的にはブリュエンニオス家との婚姻同盟を結んだ上で、反乱者側に身を転じる。^⑩

かくして、デュラキオンから少数の兵を率いてアドリアノーブルへの道を急いでいたニケフォロス・ブリュエンニオスは、トラヤノポリス近郊でトラキア・マケドニア地方の全軍を率いてやってきた弟のヨハネスと落ちあい、反乱に参加した將軍や貴族たちによって正式に皇帝として推戴された。それと前後して「諸都市のアルコンたちが皆、彼に合流し」、反乱軍は大きく膨れあがると共に、多くの町や村が通過する彼の軍を歓呼で迎えたという。この企てに加わった貴族たちのうち、名前の判明している者を列挙すれば、ブリュエンニオス一族のニケフォロス・ヨハネス兄弟と前者の息子、同家と縁戚関係にあったタルカネイオテスとヴァタツェス、アドリアノーブルを本拠とするバシレイオス・クルティケスとクートミテスといった顔ぶれが並んでいる。これから見る限り、この反乱は、かつてのトルニキオスの乱と同様、まさに血縁・地縁で結ばれたバルカン貴族たちのそれとみなすことができるだろう。意気上がる反乱軍は市民たちの熱烈な歓呼のなかを、アドリアノーブルに入城した。^⑪

西方の属州に熱狂的な空気が広がった頃、小アジアでもテマ・アナトリコンのストラテゴス、ニケフォロス

・ボタネイアテスが「皇帝」の名乗りをあげ、その本拠であるフリュギア地方から都への進撃を開始した。この企てには、彼の同郷人で親族でもあったシュナデノス家やロマノス・ストラボロマノスの他、アレクサンドロス・カバシラスやグーデリオス家の人々が加わっている。^⑫

だが、バルカンでのブリュエンニオス軍の快進撃ぶりとは対照的に、ボタネイアテス軍の行軍は当初から困難を極め、皇帝政權の要請を受けたトルコ人部隊の追撃に怯え、主街道を避けて夜闇に紛れて脇道を進む有様だった。^⑬ それというのも、彼の動員しえた手勢はごくわずかで、ニケーアの前面に到達したときでもその軍勢は三百にも満たなかったらしい。^⑭ ところが意外なことに、ニケーアをはじめ、ニコメディア、プラエネトゥス、ピュラエなど首都対岸の諸都市は次々と反乱軍に対して開城し、彼への支持を表明した。^⑮ そこから、これらの地域の人々の心が、既に中央政府から離れていたことが窺い知られる。

こうしてミカエル七世は東西から反乱軍の挾撃を受け、そのうえ都の内部でもアンテ・オキア総主教アイミリアノスの扇動によって民衆が騒ぎ始めていた。^⑯ 一〇七八年三月二五日には聖ソフィア教会に集まった反政府派によってボタネイアテスが皇帝に宣言される。^⑰ 四面楚歌となったミカエル七世は、徹底抗戦を唱えるアレクシオス・コムネノスの意見を退け、自ら帝位を降り、四月三日、ボタネイアテスが新たな皇帝として都に入城した。^⑱

ボタネイアテスの新政權は、彼の側近の「スキタイ人」ボリロスとゲルマノスや、次期皇帝に指名された彼の甥ニケフォロス・シュナデノスなど、皇帝の親族・身内で重要な地位を固める一方、自己の帝位の正統性を取り繕うために積極的な前政權との融和を図った。この結果、ボタネイアテス自身が前帝の妃マリアと結婚すると共に、彼の後継者ニケフォロス・シュナデノスをミカエル七世の妹ゾエと婚約させた他、アレクシオス・コムネノスとも和解して、彼に軍の最高指揮権を託している。^⑲ このように、ボタネイアテスの政權は、反乱に参加した彼の徒党と、前政權のコムネノス・ドゥーカス同盟との妥協の産物であった。同帝が自己の政權を自らの身内だけで固めることができなかったことは、その地位の脆弱

さを示すものに他ならない。そして、それは何よりも彼の拠って立つ軍事的實力の弱体さに起因していた。かつて精強を誇った小アジアの軍勢は、トルコ人の襲来に伴う同地の荒廃のために、見るかげもなく衰退していた。反乱に際して総計三百にも満たぬ兵力しか集められなかったボタネイアテスと、一〇五七年にイサキオス・コムネノスの支持者カタカロン・ケカウメノスが自己の親族と家兵だけで一千の軍を動員しえた事実を比べてみれば、その差は歴然としている。

この結果、東西属州間の軍事バランスは明らかに逆転していた。そのことは、反乱を続行していたニケフォロス・ブルグエニシオスの軍と、アレクシオス・コムネノスの率いる皇帝軍が対峙したときの両軍の陣容を比較してみれば一目瞭然である。反乱軍がマケドニア・トラキアの精鋭、テッサリア騎兵、近衛軍団、フランク騎士など、おそらく一万を越える軍勢を誇ったのに対し、アレクシオスの配下にはアタナトイ、コマテノイと称する軍団と少数のフランク騎士軍があるだけだった。こうした状況の下でアレクシオスが何とかこの会戦の勝利を得ることができたのは、彼の智略と幸運の賜物以外の何物でもなかった。

しかし、アレクシオスの軍事的名声が高まるにつれ、それは、華奢な寄せ木細工のようなボタネイアテス政權の内部に軋みを生じさせずにはおかなかった。皇帝への権力集中を図るポリロスとゲルマノスは、コムネノス兄弟の影響力が強まることを危険視し、彼らの失脚を画策した。既にこのときまでに旧政權の關係者のうち、コンスタンティオス・ドゥーカスは反乱騒ぎのなかで失脚し、カイサル・ヨハネスも都を離れ、自己の所領に逼塞していた。追いつめられたコムネノス兄弟は、一〇八一年の早春、首都を脱出し、トラキアの山村に集結中の軍のなかに身を投じる。今や反乱が開始されたのである。彼らと姻戚關係にあったドゥーカス家の人々（カイサルのヨハネスとその二人の孫）や不満派の貴族たち（ゲオルギオス・パラエオロゴス、グレゴリオス・パクリアノスなど）が彼らと行動を共にした。その後長期政權を樹立することになるアレクシオス・コムネノスの反乱も、主要な構成員は従来のそれとさして変わらず、親族と不満派貴族に限られていることに注意しておきたい。言うなればこの反乱は、コムネノス・ドゥーカス同盟を軸とする貴族連合とボタネイアテ

スやシュナデノスなどフリギア地方出身家門連合の対決として描き出せるものである。

他方、コムネノス、ドゥーカス、パラエオロゴスなど本来は小アジア・東方属州を本拠とする貴族家門に支持されたアレクシオスが、バルカン属州で挙兵していることも見過してはならない。東方属州の軍隊の目を覆いたくなるほどの衰退ぶりを、我々は既に目撃している。それがトルコ人の侵攻によって帝国の小アジア支配が崩壊し、彼の地の軍事・行政權を握りつつ、広大な所領を經營していた小アジア貴族の存在基盤が崩れ去ったことと表裏の關係にあったことは言うまでもなかった。コムネノス家の本領であり、イサキオス・コムネノスの挙兵時には反乱軍が集結したカスタモンの所領も、ミカエル七世の將軍だったアレクシオスが訪ねたときには住む人もなく荒れ果てていたという。こうした情勢の下、単独ではセルジュク族の侵寇に應戦しうる實力を持たぬ小アジア貴族にとって、生き残る道はバルカンに土地を獲得して生活の拠点を移すことしか残されていなかった。そして、その際に最も手近な方法は、皇帝・国家からバルカンの所領を授与されることだった。既にミカエル七世の治下、アパシオス・パクリアノスは、トルコ人に脅かされたアンティオキア近郊の自己の所領と交換に、この方法でバルカンの皇帝御料地を手に入れているし、同様に、彼の兄弟でアレクシオス帝の盟友となったグレゴリオスも、ミカエル七世の治世以降、フィリップポリス近郊の所領を中心に、多くの土地を皇帝の手から下賜されているのである。それゆえ、一見、自殺行為としか見えぬボタネイアテスの反乱にも、この視角から見れば、国家権力を獲得することで、何とか活路を見い出そうとする反乱参加貴族たちの切羽詰まった心情を容易に読みとることができよう。さらに、もはや自己の本拠で兵を挙げることにすらできなかったアレクシオス支持の貴族たちの胸に、国家機構を掌握することでバルカンにおける自分たちの生活基盤を安定させ、あわよくば小アジアの故地奪回の態勢を整えることができるのではないか、という希望が秘められていたとしても不思議ではあるまい。

その一方で、アレクシオスは西方軍総司令官という地位を利用して、バルカン貴族の一部を配下に取り込んでいたふしが認められる。ブリュエニシオスに続いてバルカンで挙兵したニケフォロス・バシラケスの軍との戦闘では、バシレイオ

ス・クルティケスやペトロス・トルニキオスといったマケドニア出身の貴族たちがアレクシオスの下で勇戦している姿が目に見えるのである。^④

それゆえ、首都に進軍し、帝位を奪ったアレクシオス・コムネノスの反乱は、小アジア出自の貴族たちの支持を集めながらも、現実にはバルカン属州の人的・物的資源に依存する面が大きかったと推察される。

では、一〇八一年のアレクシオス・コムネノスの反乱を、一〇五一年のイサキオス・コムネノスのそれと対比した場合、両者にはいかなる相違が認められるだろうか。この問いに対する答えは、当然、後者の政権が短命に終わらざるをえなかったのに対して、なぜアレクシオスは長期安定政権を築き得たのか、という答えをも導くものでなければならない。ここまでの考察から見ると、両者の運命を分けたのは井上氏の説くような、反乱の過程でイサキオスが皇帝独裁の道を歩み出し、アレクシオスが貴族連合の路線を受け入れることだったと結論付けるのは、筆者には性急であるように感じられる。現実には成立したのは、いずれの場合とも、小アジア貴族を中心とした党派的性格の濃厚な政権だった。対立皇帝として年長のイサキオスではなく弟のアレクシオスを推すこと、カイサル位を提供するというボタネイアス側の妥協的提案の拒絶、そしてエイレネ・ドゥカイナの皇后戴冠と、一般慣行やコムネノス家の思惑を押し切って貫徹されたヨハネス・ドゥーカスの主張^⑤の背後に、新政権において自己の一族の発言権を最大限に確保しようという願望以上のものを求めるには、いささか踏み込みすぎではあるまいか。

むしろ、両者の相違点として注目すべきなのは、小アジアを本来の地盤とするアレクシオス・コムネノスらの貴族グループがバルカン属州で兵を挙げている事実である。ボタネイアス政権の皇帝軍に比べ、ブリュエンニオスの反乱軍が圧倒的に優勢だったことに象徴されるごとく、東西属州間の軍事的（そしておそらくその背後の経済的）実力は世紀中頃とは完全に逆転していたのであり、アレクシオスも、反乱に際してはこの地域の人的・物的資源に頼らざるをえなかったの

である。その結果、新帝アレクシオスは、自己の直接的な支持基盤である小アジア系貴族と共に、西方属州の有力貴族たちとの融和を図ることを迫られた。なぜなら、今やこの地域こそが、滅亡に瀕した帝国の命綱的存在だったからであり、同地の有力貴族たちの協力ぬきには帝国の再建は覚束なかったのである。この意味で、彼の帝国再建の方向性は、この反乱の過程で定まったと言っても過言ではなからう。

こうした帝国の政治重心の西への移動は、国家の社会・経済面の構造変化をも生み出した。この時期、目を引く経済現象は、帝国へのイタリア商人の進出が目立ち始めたことである。前述したごとく、小アジアの同輩に比べ、都市生活と親密な関係にあった西方属州の貴族たちにとって、この出来事は決して無関心ではいらなかったに違いない。そして、皇帝がこうした動きにどのような対応を示したかを見れば、彼のバルカン貴族に対する姿勢もおのずと明らかになるだろう。そこで次に、我々は同帝のヴェネツィアに対する特権下賜の問題に目を転じてみたい。

① それと同時に、この時期の政治史の流れを、皇帝独裁権の強化を図る歴代皇帝政権と、それを打破し、選挙王政理念に基づく貴族連合政権の樹立を目指す属州貴族という二つの政治路線の対決の図式で説明しようとする井上氏の所論が、現実の政治シーンのなかでどの程度、検証しうるかという点に関しても、この考察の過程で解答が見い出されるであろう。

② この時期以外に起きた反乱事件として、一〇四〇年のブルガリア人、一〇六六年のテッサリアのワラキア人の蜂起が挙げられるが、これらは、貴族反乱というより民族独立運動としての色合いが強く、ここでの検討対象からは除外してよいだろう。

③ 第一の期間は、国境辺で不穏な動きが生じつつあったとはいえ、帝国が依然、相対的な平和と繁栄を享受していた時期、それに対して第二の期間は、一〇七一年のマンツィケルトの敗戦後、帝国内外の情勢

が急激に悪化した時代である。この二つの時代の明暗の差を経済的視角から分析したのが、C. Morisson, "La dévaluation de la monnaie byzantine au XI^e siècle: essai d'interprétation," *Travaux et Mémoires*, 6, 1976, pp. 3-47, ㉔㉕。

④ 同帝の政策全般に関しては米田「十一世紀ビザンツの文治主義」参照。

⑤ Michael Psellus, II, p. 4.

⑥ Scylitzes, p. 427.

⑦ ソエとの結婚以前に死去したモノマコスの先妻はスクレロス家出身（ロマノスのいとこ）であり、今回の結婚は両家の同盟関係を再確認するものであった。この二人のスクレロス家出身の女性については、Seibt, *Die Skleroi*, S. 70-76.

⑧ プロトストラトルは、元来皇帝の乗馬を管理する馬丁長官に相当

する官職だが、九世紀以降重要性を増し、十一世紀には軍事指揮官として大きな役割を演じるようになる。cf. R. Goulland, *Recherches sur les institutions byzantines*, I, Amsterdam, 1967, pp. 478-497. その後、ローノスはキントコス帝のトビテ・マテオシオンのベントラー・コス、アンティオキアのドゥクスを歴任し、爵位もプロエトロスに進んだ。cf. Seibt, *Die Skleroi*, S. 77-80. など。スキュロス家はローノスの曾祖父バルダスが反乱に失敗して以来、次第に文官貴族化していったと言われる (cf. Kanar, *Сюдашныи роды*, стр. 141) など。ローノス個人については図式を添えておく。

- ⑧ Skylitzes, p. 427.
- ⑨ Michael Psellus, II, p. 5f.
- ⑩ トルニキオス家は本来、アルメニアの王族の家柄だが、二章で触れたいように、この時期にはトドリ・アノールに定着し、生粋のマイケドニア貴族とならなう。cf. P. Charanis, *The Armenians in the Byzantine Empire*, Lisbon, 1963, p. 46f.
- ⑪ cf. Kaner, *Emperors and Aristocrats*, pp. 258-262. M. Angold, "Archons and Dynasts: Local Aristocracies and the Cities of the Later Byzantine Empire," in: M. Angold, ed., *The Byzantine Aristocracy*, pp. 236-253, esp. p. 242.
- ⑫ Skylitzes, p. 439.
- ⑬ *ibid.*, p. 441. とりわけ、アナトラスとウマタシスはバルカンの代表的な貴族家門であり、彼らの一族の成員は十一世紀以降、重要な地位を歴史上に占めることになる。
- ⑭ *ibid.*, p. 441.
- ⑮ Michael Attaleiates, p. 29.
- ⑯ Michael Psellus, II, pp. 18-19. は、反乱軍に多くの人々が合流し、内陸部の軍隊に参加したと報じている。

オスの息子だったとすれば、彼が仇敵ローノス＝スキュロスの幅を越え、反乱軍を嫌ったのかもしれない。

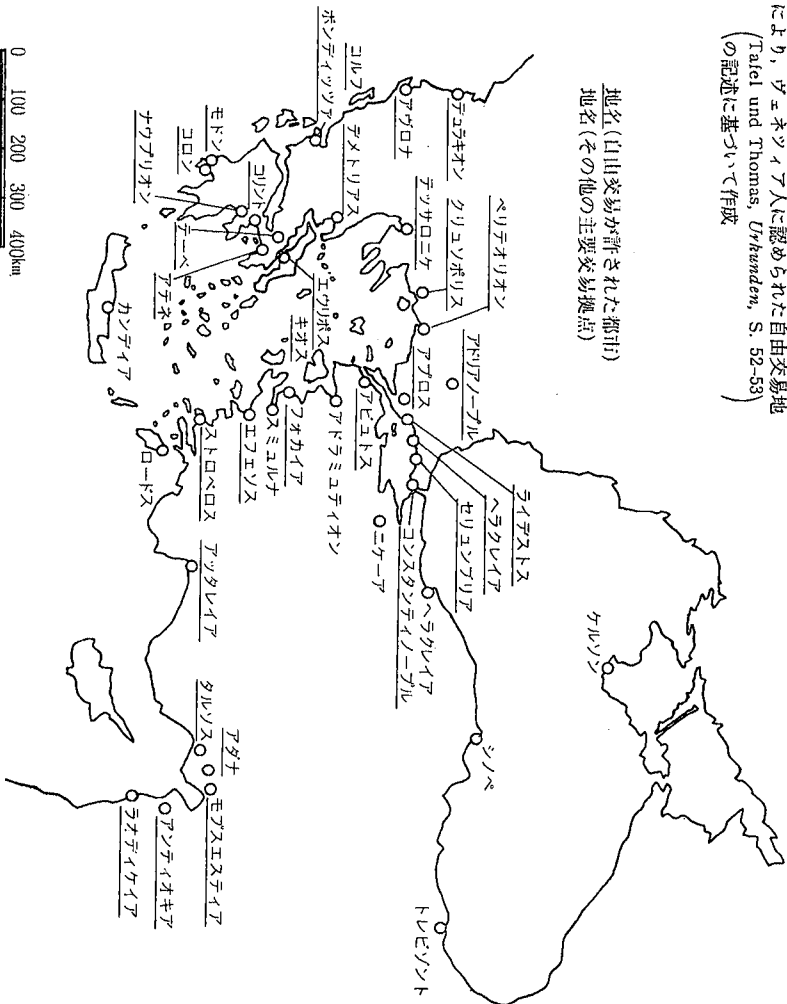
- ⑰ Skylitzes, pp. 492-495.
- ⑱ Michael Psellus, II, p. 89.
- ⑲ Skylitzes, p. 495.
- ⑳ cf. Kaner, *Emperors and Aristocrats*, pp. 327-330.
- ㉑ 井上「コムネノス朝の成立」、八七—八八頁。
- ㉒ 唯一の例外は、イサキオス＝コムネノスの反乱にバルカン貴族のフリテュンニオスが加担したことだが、直接行動には参加していない。cf. Kaner, *Emperors and Aristocrats*, pp. 313-315.
- ㉓ 以下の記述は、基本的に Seibt, *Die Skleroi*, S. 76-85. に拠る。
- ㉔ 東方のストラテゲ・バルダスは東部前線の全軍隊をその指揮下に統轄する高位の軍事官職である。cf. N. Oikonomides, *Les listes de préséance byzantines des IX^e et X^e siècles*, Paris, 1972, p. 334f.
- ㉕ この点で、ローノス＝スキュロスと利害を異にするテオフィラクティス＝マニツケスが反乱軍を捨て、皇帝方に走ったこと(本章註⑳)を想起せよ。
- ㉖ 井上『ビザンツ帝国』三四三—三四七頁。
- ㉗ cf. 渡辺金一『コンスタンティノープル千年』、岩波書店、一九八五年、一七三—一八三、二一三—二一九頁。
- ㉘ Ioannes Skylitzes, ed. I. Bekker, II, Bonn, 1839, p. 641.
- ㉙ 一〇三一年の二つの災厄に関する記述は、Angold, *The Byzantine Empire*, pp. 21-33. 参照。
- ㉚ cf. Polemis, *The Doukai*, pp. 35-41, 58-60.
- ㉛ 彼らは一〇五七年の反乱者イサキオス＝コムネノスの弟ニコハネノスの息子であり、兄イサキオスはミカエル七世の妃の親族で、そして弟ニコハネノスはカイサルの孫娘と各々結婚した。cf. Nicephorus Bryennius, p. 143, 235.

- ⑳ Skylitzes, p. 441. このヴァンタシスは、トルニキオス軍に参加したニコハネノス＝ヴァンタシスの近親者であるのは間違いないだろう。
- ㉑ *ibid.*, p. 442.
- ㉒ Michael Psellus, II, p. 29.

⑬ この政權のより重用された数少ない軍事貴族の一人、カタカロン＝ケカウメノスも一〇五六年にアンティオキアのドゥクスの地位をミカエル六世の甥ミカエル＝ウラノスに譲り渡した。cf. Skylitzes, p. 483.

- ㉓ cf. Michael Psellus, II, p. 84f.
- ㉔ Skylitzes, p. 488f. バシレイオス＝アルギエロスは皇帝ローノス三世(在位一〇二八—一〇三四)の兄弟、ボタネイアテスは将来の皇帝ニコファロス二世(在位一〇七八—一〇八二)、ブルツェスも十世紀以来の名門貴族である。ローノス＝スキュロスは本章註⑧の人物と同一。
- ㉕ *ibid.*, p. 489-492.
- ㉖ この官職については、Goulland, *Recherches*, pp. 382-385. を参照。
- ㉗ 彼は最後のバルガリア王ニコハネノス(イヴァン)＝ウラディミラフの息子。彼の姉妹マテカリナはイサキオス＝コムネノスに嫁いでいた。cf. Kaner, *Emperors and Aristocrats*, p. 240.
- ㉘ キキリニョンの本文は、イラカニオテス・T'peraweris と表記されている (p. 494) が、この語は慣用に統一した。同家はヴァンタシス・フリテュンニオスらと並ぶバルカンの名門であり既にバシレイオス二世の下でアレゴリオス＝タルカネイオテスがビザンツ領イタリヤの長官職を務めている。cf. V. von Falkenhausen, *Untersuchungen über die byzantinische Herrschaft in Süditalien von 9. bis ins 11. Jahrhundert*, Wiesbaden, 1967, S. 84f.
- ㉙ それらのなかには、テオフィラクティス＝マニツケスの姿もあった (Skylitzes, p. 492.)。一般に推測されるように、彼が反乱者ゲオルギウス, p. 143, 235.

- ㉚ *ibid.*, p. 265.
- ㉛ Polemis, *The Doukai*, pp. 48-53.
- ㉜ cf. 拙稿「ラヴラニス穀物専売政策をめぐって——十一世紀ビザンツの国家と官僚——」、『史料』七〇巻一、一九八七年、四四—七二頁。
- ㉝ Michael Attaleiates, pp. 244-249. このヴァンタシスは、おそらくトルニキオスの反乱に抵抗したための豪族の後裔であろう。
- ㉞ Nicephorus Bryennius, p. 223.
- ㉟ 彼が前述のバシレイオス(本章註⑧)の同族であるのは間違いない。彼の祖父ニコハネノスはアンティオキアのドゥクスだった。cf. Nicephorus Bryennius, p. 201.
- ㊱ *ibid.*, pp. 223-225. カタカロンの姉妹ニコハネノス＝ブリテュンニコスの息子が結婚した。
- ㊲ *ibid.*, p. 227.
- ㊳ 名前は不詳、ントリキオスという官位名で呼ばれていた。cf. *ibid.*, p. 229.
- ㊴ *ibid.*, p. 229. クルタイケス家はトルニキオス家同様、アルメニアのバグレートに定着した家門である。cf. Charanis, *The Armenians*, p. 44f. クラニキテスについては、ブリテュンニオスの編者マ・トリーヤ(p. 228, n. 3)はアレクシオス帝のベチエネ遠征に同行した人物に比定するが、推測の域を出ない。
- ㊵ cf. Michael Attaleiates, p. 247f.
- ㊶ シタデノス家はフリギヤ地方のシタダ、ストラボロノス家は同地方のベンタポリスを本拠としており、ボタネイアテスの姉妹はテオ・タロキ＝シタデノスと結婚していた。cf. Nicephorus Bryennius, p. 260. C. Hännick und G. Schmalzbauer, "Die Synadenoi, Prosopographische Untersuchung zu einer Familie," *Jahrbuch*



四 対ヴェネツィア特権下賜の背景

帝国に來襲したノルマン軍との戦争のさなかの一〇八二年五月、アレクシオス・コムネノスはヴェネツィアに宛てて黄金印璽文書を交付し、同市に大幅な通商特権を授けた。^②ヴェネツィアに対して帝国全土に及ぶ港市(地図参照)での自由交易の認可と、首都の金角湾沿いに三つの船着場を備えた彼ら専用の居留地の授与を骨子とするこの措置は、^③東地中海の国際商業の覇権をイタリア海運都市に明け渡す端緒となり、さらには帝国がその後、彼らの経済的従属の下におかれることになった出発点として、世のビザンティニストたちには極めて不評である。^④

だがその一方で、近年、それが帝国経済にもたらしたプラスの効果を指摘する研究者も現れ、またそれと平行して、この時期、イタリア商人が帝国経済に及ぼした影響力を過大評価するのは禁物とする意見も生まれている。^⑤このように、この出来事をめぐる評価は今日、再び揺れ動きつつあるので、ここではまず、それをめぐる歴史的背景を明らかにし、それによって皇帝が採った方策の意味を考察することから始めねばならない。

第一に指摘すべきことは、これに先立つ一世紀ほどの間に、ビザンツィオ・ヴェネツィア間の貿易の規模・構造が大きく変貌していたことである。その変化の軌跡をたどるには、先行する九九二年の黄金印璽文書(その眼目は、帝都に向かうヴェネツィア船がアビュドス税関で支払う関税を、行き二ノミスマタ、帰り十五ノミスマタに引き下げることだった)と今回のその内容を比較するだけでさしあたり充分であろう。九九二年の場合、首都航路しか問題にされていない交易地域は、今回は帝国全域に広がっているし、交易品目についても、通説の言うごとく九九二年文書における往復の税額の差が船荷の価値を反映したものであれば、^⑥それは、首都周辺の奢侈品交易が主軸と考えられるのに対し、今回、属州都市で取引されていた商品は、主に穀物・葡萄酒などの農産物だったと推定されるのである。^⑦こうした黄金印璽文書の内容の変化が現実の貿易構造の変化に対応するものであったことは、アレクシオス帝が同文書を交付する以前から、ヴェネツィア商

船が帝国各地の港に來航し、交易を行なっている姿が文書記録から確認されることから裏付けられよう。^⑧

これらの交易のビザンツ側の手としてそこから利益を得ていたのは、海岸近くに所領を持ち、その余剰農産物を港で売却できた貴族・領主だったに違いない。^⑨だが、地方都市や在地領主が直接ヴェネツィア商人と取引を行ない、彼らと経済的提携を深めることは、伝統的な首都コンスタンティノープルを求心点とする集権的経済体制を弛緩させ、帝国の統一を脅かすものだったから、中央政府はしばしばこうした動きに統制を加えようとした。^⑩けれども、集権体制の再建の願いを込めてミカエル七世政権がライデストスに設立した穀物取引所がヴァツェスらの叛徒の一団の前にあえなく打ち倒された事実が物語っているように、属州貴族の所領経営に有利な、自由な経済体制はもはや人為的に押しとどめられねばどに発展していたのである。^⑪

こうした状況の下でアレクシオス一世が従来の中央政府の方針を一八〇度転回させ、帝国全土での自由交易をヴェネツィア人に許したことは、彼の政権の背後にある「封建貴族」の利害を代弁するものであったと語るE・フランチェスの見解をさわめて魅惑的な光で満たすことになった。^⑫ただし、彼の立場はごく大雑把なもので、その細部には検討の余地を残す部分も少なくない。たとえば、皇帝によって認められた交易地は、コムネノス家と彼を支持した小アジア貴族の本来の勢力範囲の外に位置している点がそれである。つまりそれは、皇帝の直接の支持基盤を構成する党派よりも、むしろ在野の領主層に多くの恩恵を施すことを意味していた。第二には、今回の自由交易地に黒海沿岸地域が除外されていることに論及し、フランチェスは、それを、ヴェネツィア商人が黒海北岸の穀倉地帯と直接交渉を開き、ビザンツ貴族の所領生産物と競合する事態を回避するねらいがあった、と説明しているが、^⑬それならばなぜ、小アジアやバルカンの黒海沿岸も合わせて除外されねばならぬのか理解できないし、またこの時期に黒海北岸が重要な穀物輸出地帯だったという立論自体が近年、疑問視されるに至っている。^⑭

これらの問題は、アレクシオス帝の施策がそれまでにヴェネツィア商船の訪れた実績のある地域を対象とし、それら

の地の在地有力者（とりわけバルカン地方のそれ）の支持を得るためになされた、という前提に立って初めて説明がつくと筆者は考える。第一に、もしこの措置が地方住民や在地領主層にとって単なる負担増でしかなかったならば、対ノルマン戦のため小アジア駐留の兵が引きあげられていた当時、同地に何ら強制手段をもたぬ帝国政府がどうしてそれを実行できたであろうか。ゆえに、皇帝は、この措置が在地勢力に受容される成算があったと見るのが穏当であろう。一方、黒海の立ち入り問題については、それまで外海でのヴェネツィア船の行動を完全に規制できなかった中央政府も、コンスタンティノープルを制することで容易に黒海進入の扉を閉すことができたと考えれば合点がゆくだろう。

その際に、皇帝がバルカンを重視し、当地の人々の利益を図ったことは、彼が同地域に承認した自由交易地の数が、小アジアのそれのおよそ二倍に達していることから推察できるのだが、ここではさらに幾つかの傍証を挙げて、この事実を検証しておきたい。

まず、アレクシオス帝が従来の帝都を求心点とした集権的経済体制再建指向から決別し、在地領主層に有利な、自由な経済体制を受容・推進しているのを裏付ける指標として、次の二点が指摘できる。第一に、かつてミカエル七世政權下の穀物専売政策打倒の急尖峰となったヴァタツェス家の本拠ライデストスをはじめとするトラキア沿海都市（それらは、同地域で生産された豊かな農産物の集積・出荷のセンターとして機能していた）が数多く黄金印璽文書の交易地リストに収載されていること。①②二点めは、属州絹産業の中心地テーベにヴェネツィア商人の立ち入りを公式に認めている点である。③④十世紀の『総督の書』からも知られるように、これまで中央政府は、戦略物資である絹産業の首都による独占に腐心し、その技術が都の外に流出するのを厳しく取締っていた。⑤その観点から見れば、テーベでの絹織物業の成立を既製事実として容認し、外国商人との自由交易を許したアレクシオス帝の態度は、政府の政策を根本的に転換し、地方住民の利害の前に大きな譲歩を行なったことを意味している。また、内陸都市としてはほぼ唯一、アドリアノープルが黄金印璽文書のリストに加えられていることも、⑥同市がバルカン貴族最大の本地として隠然たる勢威を依然維持し、そのうえ、アレクシオス

の反乱時には敵対的な態度を示したことから、⑦同市の人心掌握が皇帝にとって緊急の課題となっていたのと決して無関係ではないだろう。このように、皇帝のヴェネツィアへの特権下賜政策は、（対ノルマン戦でのヴェネツィア海軍の援助を確保すると共に）ヴェネツィア人との交易から利益を得ていた帝国諸地域の有力者・領主層の既得権を認め、それを積極的

に保護する姿勢を示すことで、⑧彼らの支持を得ようとしたものと言えよう。⑨これまで自己の党派で利益を独占すべく、政權外の貴族の利害を排除して際限もない抗争を繰りひろげていたビザンツ皇帝政權が、ここに至って突然従来の姿勢を改めたのにはもちろんわけがあった。我々は既に、アレクシオス一世の政權には、発足当時の事情から、広い貴族勢力の結集と融和を図りうる契機が内包されていたことを目にしてはいるが、それがこの段階で実現された背景を検討しておかねばなるまい。それには、まず当時の時代の様相を把握しておく必要がある。

一〇八一年十月十八日、ノルマン軍の囲むデュラキオン救援に赴いたアレクシオス帝直率のビザンツ軍は、同市城外で敵の主力と激突し、惨憺たる敗北を喫してしまった。⑩皇帝の縁者である有力貴族たちも多く戦場に斃れている。翌年二月のデュラキオン陥落がこれに追い打ちをかける。⑪発足したばかりの同帝の威信が大いに揺らいだことは想像に難くない。再起を期すべく皇帝はいったん都に戻ったが、軍隊再建に必要な資金は前政權によって蕩尽された国庫には残されておらず、その挙句、教会財産に手をつけようとして市民の怒りを買ひ、宮廷内部にも不穏な空気が漂いはじめる有様だった。⑫皇帝にとって唯一の朗報は、イタリア半島での外交工作が効を奏して四月にロベール・ギスカルが帰国を余儀なくされたことであつたが、エペイロスには彼の長子ボエモンが強力な軍勢と共に居座っていたから、油断はできなかった。だが、行動を起こすとしたら今を待たない。その際、皇帝は二つの条件を満たす必要があつた。イタリア本土から敵の来援を阻止するのに必要な海軍力の確保と、全力をノルマン戦争に集中するための国内情勢の安定である。ここに、ヴェネツィアと国内不満勢力の双方の支持を得るために皇帝が黄金印璽文書の発布を決意した動因が認められよう。かくして、同文書交付と時と同じ一〇八二年五月、揺らぎかけた威信を回復し、ノルマン戦に決着をつけるべく、皇帝は勇躍して軍事行

動を再開する。^⑨

対ヴェネツィア通商特権下賜によって恩恵を被ったのは、古くから沿岸地域に生活基盤を築いていた領主層だけではなく、最近になってそれらの地域に移住した小アジア出身の貴族家門も同様だったと思われる。後者は所領の生産物を市場で売却し、都市内に店舗その他の不動産を所有するなど、商品経済に能動的に関与し、生活様式の面でもバルカン貴族の都会的なそれに次第に同化していったらしい。たとえば、ニケフォロス・メリッセノスに従ってバルカンに移り、テッサロニケ近郊に所領を獲得したサミュエル・ブルツェスの家では、所領の半分を相続した彼の息子が、それをテッサロニケ市内の七軒の店舗と交換し、自己の経済的基盤を農業収入から都市の商業収益に移しているのが確認される。^⑩

皇帝自身もこうした動きを積極的に支援したらしく、ヴェネツィアへの開港地としてさしたる経済的価値もないペリテオリオンの町が含まれたのは、同地とその周辺に広大な所領を保持したアレクシオス政権の重鎮グレゴリオス・パクリアノスの意向に沿ったものだったと思われるし、また自己の子息イサキオス・コムネノスにはバルカン沿海部に大規模な所領を授与したうえ、所領での生産物を市場に運ぶための船十二隻分について免税措置を構っているのである。^⑪

こうして、アレクシオス帝の政策により、属州有力者の経済的な不満は解消し、彼らを中央政府に対する反乱に駆り立てたエネルギーは徐々に鎮静化した。このことは、同帝の治下、唯一の目立った属州の貴族反乱であるグレゴリオス・タロニテスのそれが他の貴族の支持を得られず、皇帝の征討軍の前に苦もなく鎮圧されている点からも窺える。

それゆえ、もしも井上氏の言うような貴族連合政権がアレクシオス一世の下で成立したとするなら、一握りの貴族グループ相互による不毛な権力闘争が最終的に克服され、バルカン地方を主たる経済基盤とした貴族階層の利害を包括的に保障する体制が完成したこの一〇八二年五月という時期こそ画期とせねばなるまい。今や、支持基盤の裾野を少数の小アジア系貴族から広範な貴族層全体に広げたアレクシオス・コムネノス帝のもとで、帝国再建事業はようやく軌道に乗るのである。

- ① ヴェネツィア郊黄金印璽文書が交付された日付に関しては、従来、原本に残されたインディクティオ暦を決め手に、一〇八二年五月とするのが定説だったが、フランチェスコ・マーティン・ブローネが新たに「一〇八四年秋とする説を提示した。彼らの説の骨子は、この時期、ヴェネツィアでは親ビザンツ派のドージエが失脚し、またロマン・ル・キスカールのビザンツ遠征も再開されたため、ビザンツ側はヴェネツィアの支援を維持するための苦肉の策として、一〇八四年秋にヴェネツィア使節が来訪したおりに黄金印璽文書を交付した、と主張している。しかし、ホルサリは「この特権下賜はドージエに授けられたはずのプロトセバステス爵位を、それ以前に前ドージエが帯びていたことを指摘し、一〇八二年説を擁護した。筆者はこれに従う。cf. E. Frances, "Alexis Comnène et les privilèges octroyés à Venise," *Byzantinostavica*, 29, 1968, pp. 17-23, M. E. Martin, "The Chrysobull of Alexius I Comnenus to the Venetians and Early Venetian Quarter in Constantinople," *Byzantinostavica*, 39, 1978, pp. 19-23, O. Tüma, "The Dating of Alexius's Chrysobull to the Venetians: 1082, 1084 or 1092?," *Byzantinostavica*, 42, 1981, pp. 171-185, S. Borsari, "Il crisobullo di Alessio I per Venezia," *Annali dell'Istituto Italiano per gli studi storici*, 2, 1970, pp. 111-131.
- ② G. L. F. Tafel und G. M. Thomas, *Urkunden zur alten Handels- und Staatgeschichte der Republik Venedig*, Wien, 1856-57, S. 51-54, Döger, *Regesten*, n° 1081.
- ③ この黄金印璽文書で授与されたその他の特権の内容は以下の通り。
 - (1) ドージエおよびその後継者はプロトセバステス爵位を付随の年金と共に保持すること
 - (2) クラード総司教およびその後継者はデュムルティモス称号をそれらに付随する収入（年々金二〇ギンタ）と共に受領すること
- ④ 毎年金二〇ギントをヴェネツィアの諸教会に授与する。
- ⑤ 帝国内で交易するマルファン人はヴェネツィアの聖マルコ教会に年三ノミヌタを支払う。
- ⑥ テオラキオンの聖アンドレア教会をヴェネツィア人に譲渡する。
- ⑦ 代表使節として、P. Charanis, "Economic Factors in the Decline of the Byzantine Empire," *The Journal of Economic History*, 13, 1953, pp. 412-424, J. Herrin, "The Collapse of the Byzantine Empire in the Twelfth Century: A Study of Medieval Economy," *University of Birmingham Historical Journal*, 12, 1970, pp. 188-203, を参照せよ。
- ⑧ cf. M. F. Hendy, "Byzantium, 1081-1204: An Economic Re-appraisal," *Transactions of the Royal Historical Society*, 20, 1970, pp. 31-52, esp. p. 40f, R. J. Lilie, *Handel und Politik zwischen dem byzantinischen Reich und italienischen Kommunen Venedig, Pisa und Genua in der Epoche der Komnenen und Angeli (1081-1204)*, Amsterdam, 1984, S. 277-284, 309f.
- ⑨ cf. Hendy, *Monetary Economy*, pp. 590-602.
- ⑩ Tafel und Thomas, *Urkunden*, S. 36-39.
- ⑪ cf. H. Brown, "The Venetians and Venetian Quarter in Constantinople to the Close of the Twelfth Century," *The Journal of Hellenic Studies*, 40, 1920, pp. 68-88, esp. p. 69f.
- ⑫ たとえば「一〇八二年」ナウポリオンに停泊していたヴェネツィア船は「油、銅、亜麻織物、武器、石炭、アーヘン、干葡萄、穀物、オリブを積んでいた（このうち亜麻、銅、武器はヴェネツィアからのもの）」cf. Lilie, *Handel und Politik*, S. 269f.
- ⑬ R. Morozzo della Rocca & A. Lombardo, *Documenti del commercio veneziano: nei secoli XI-XIII*, 2ome, Torino, 1940, t. I,

n° 10, p. 11. (ギリヤン) n° 12, n° 13, pp. 11-13. (ムスリマノビ)

① 事実、十二世紀半ばの文書には、ヴェネツィア商人とオリブ油取引を行なっているスバルタのブルコンが登場している。A. Lombardo & R. Morozzo della Rocca, *Nuovi Documenti del commercio veneto del sec. XI-XIII*, Venezia, 1953, n° 11, p. 14, cf. Angold, "Archons and Dynasts," p. 240.

② だが、十一世紀半ばに帝国海域の通商航海を統轄する官庁「*ἐφεστω τῶν ἀναβαταρίων*」が新設されたことは、同じく意向に無関係ではある。cf. H. Ahnweiler, "Fonctionnaires et bureaux maritimes à Byzance," *Revue des Études byzantines*, 19, 1961, pp. 239-252, 250-252.

③ 拙稿「バイザンティンス穀物専売政策をめぐって」参照。

④ Frances, "Alexius Comnène," 井上浩一氏もほぼ彼の説に同調している。同氏「コムネノス朝の成立」一〇〇頁。

⑤ ヘンリーの研究によれば、有力な小アジア貴族はつくわすかしが海岸地域に分布している。cf. Henry, *Monetary Economy*, pp. 100-108.

⑥ Frances, "Alexius Comnène," p. 23.

⑦ cf. Henry, *Monetary Economy*, pp. 44-48.

⑧ Anna Comnena, I, pp. 136-138. 皇帝はムスリム人との協定で、エラッコン川を両者の境界とした。

⑨ 首都コンスタンティノープルを除き、バルカン側（コルフ島とエペイロ島のエペイロスを含む）は二〇、それに対して小アジア側（キオス島を含む）は十一にすぎない（付地図参照）。

⑩ この地域とヴェネツィア商人との経済的結び付きについては、G. I. Bratianu, "Une expérience d'économie dirigée: le monopole du

bié à Byzance au XI^e siècle," in: Bratianu, *Études byzantines d'histoire économique et sociale*, Paris, 1938, pp. 141-157. 特に p. 150. を参照。

⑪ 本章註⑩にあげた資料から、既にこれ以前からヴェネツィア商人がこの町との接触を図っていたことがわかる。

⑫ たとえば、『総督の書』八条七項「奴隷あるいは傭人あるいは職人を〔都の〕外部ある者は外国人に売り渡す者は、手を切られる」などの規定を参照。The Book of the Eparch, p. 37. 絹織物の生産・売買をめぐり帝国政府の統制政策に関については、R. S. Lopez, "Silk Industry in the Byzantine Empire," *Spectulum*, 20, 1945, pp. 1-42. を詳く。

⑬ cf. E. Weigand, "Die helladisch-byzantinischen Seidenweberei," in: *Εἰς μνήμην Ἐρπιδίου Ἀκτινίου*, Athens, 1935, pp. 503-514.

⑭ 自由交易地に選定された都市のひとつとして検討を加え、その背景を探っているリリーエは、「アドリアノープルに関して」「都市としての大きさが決め手となった」という精彩を欠いた答えしか用意できなかった。cf. Lilie, *Handel und Politik*, S. 54.

⑮ Anna Comnena I, p. 84. フレリノノープル周辺の住民は「かつてアレクシオスがブリュエンニオスの野望を砕いたことを恨んでいたのである」。

⑯ このように在地勢力の利害を再確認し、彼らの協力で安定した支配体制を築こうとするアレクシオス帝の政治手法は、同帝の政権の性格を考える際の重要な鍵である。cf. Angold, "Archons and Dynasts," p. 243.

⑰ Anna Comnena, I, pp. 163-166.

⑱ コンスタンティノス・ドゥーカス・ニケフォロス・バラエオロギス・ニケフォロス・シメナデノスなど（各々、前章註④⑤⑥参照）。

merle, "Le typon de Grégoire Pakourianos," pp. 176-177. の間に付されている地図を参照された。

⑲ Delger, *Regesten*, n° 1284.

⑳ 米田治泰氏は「この反乱が『もはや首都ではなく小アジアの一方都市を拠点にせねばならなかった』ことにアレクシオス帝の政権安定化の過程を見い出しているが、筆者はむしろ、それまでの反皇帝運動が宮廷陰謀に限定されたことを重視した。cf. 米田治泰「コムネノス朝期にザンソンのセナトル貴族層」同氏『ビザンツ帝国』一九一―二二六頁、特に二二二頁以下。

五 結びにかえて

広範な貴族層の経済的利害を守り、真の貴族階層結集へと態勢を転じたアレクシオス一世の政権は、当然、政権内部における貴族たちの勢力バランスにも影響を及ぼした。最後にこの点を見届けて本稿を閉じることにしよう。

結論から先に言えば、それは、アレクシオスの反乱以来彼の周囲を固め、大きな発言力を有していた小アジア系貴族の相対的な地盤沈下とバルカン貴族の宮廷参入・地位の向上とによって集約できる。これについて、皇帝の長女アンナの結婚をめぐる動きは示唆的である。一〇八三年十一月に生まれた彼女の最初の婚約者は廃帝ミカエル七世の息子コンスタンティノス・ドゥーカスであった。アレクシオスは有力な同盟者であるドゥーカス家への配慮から、彼を既に形式上、共治帝の地位に就けており、この婚約自体、両家の同盟を再確認するものに他ならなかった。ところが当のコンスタンティノスが一〇九五年頃に死去すると、皇帝がアンナのために次に選んだ新郎はバルカンの名門貴族ニケフォロス・ブリュエンニオスだった。ドゥーカスからブリュエンニオスへという、この皇帝側の関心の変化こそ、その背後にあった東西貴族間の力関係の推移を感じさせて余りあるものと言えよう。このように皇帝は、バルカン貴族を積極的に登用することで小ア

ジア系貴族の影響力を相殺させ、両者の均衡の上に、自己の行動の自由を確保しようと意図したのである。

一方、反乱に際してアレクシオスの権力獲得に手を貸した小アジア系有力貴族たちを、皇帝は各々、要職につけて彼らの力を自己の政権強化に活用しつつ、反面、彼らに対して決して警戒の念を解かなかったように見うけられる。西方軍総司令官グレゴリオス・パクリアノスが戦死するとすかさず皇弟アドリアノスを後任に据えたこと、小アジアで反乱を起こした前歴をもつニケフォロス・メリッセノスはカイサルとして厚遇される一方、終生バルカンの諸戦線に転戦を強いられ、二度と小アジアの土を踏むことなく世を去っている点など、この好例であろう。^⑥

かくして、一〇八七年に嫡男ヨハネスを得て帝位の後継者を確保したアレクシオス一世は、国家の重要官職を漸時、コムネノス家の近親に集中させ、他方で貴族層全体の経済的利害を尊重し、できるだけ広い範囲の貴族たちを政権に加えること（それは同時に、個々の有力家門の発言力を相対的に低下させる効果をもった）で、一見、貴族連合的な容貌を呈したコムネノス朝政権のなかにあって、長く安定した政権を樹立することに成功したのである。^⑦

① Anna Comnena, I, p. 116.

② 彼は同名の反乱者の孫。cf. Skoulatos, *Les personnages byzantins*, pp. 224-232.

③ グレゴリオス・パクリアノスは西方軍総司令官としてアドリアノーブルに、そしてゲオルギオス・パラエオロゴスはノルマン人との緊張の高まるデュラキオンのドゥックスに配置された。

④ cf. Anna Comnena, II, p. 88.

⑤ cf. Skoulatos, *Les personnages byzantins*, p. 240-245.

⑥ この他、ゲオルギオス・パラエオロゴスに続くデュラキオンのドゥックス職はアレクシオスの義兄弟（ヨハネス・ドゥーカス）及び同帝の二人の甥（兄イサキオスの息子）が相次いで占めている。ibid., pp. 12-14, 135-138, 145-150.

⑦ 今回の研究では、個々の貴族の生活の基盤となった「イエ」経営の実態や、地域社会におけるそのあり方に深く立ち入ることができなかった。こうした課題については、稿を改めて検討したい。

（京都大学大学院生 京都市左京区鹿ヶ谷桜谷町三八番地 山田方）